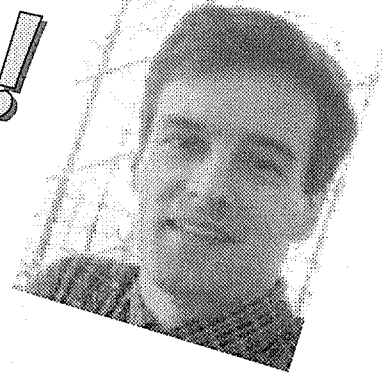


みやぎ教育文化研究センター主催 講演会

アーサー・ビナード! ふたたび現る



詩「ブラザー軒」のある街で

詩人・菅原克己を語る

とき 2009年8月29日(土)
14:00~16:30
ところ 東京エレクトロンホール宮城
601会議室(宮城県民会館)
参加費 800円

在日2年目にして、菅原克己の詩に遭遇。「朝のテーブルの上に／木の葉の影が散らばっている。／ぼくの方はすでにすんでるのに／かみさんはまだパンを千切っている。／彼女の興味は、いまや／ジャム壺に残った苺ジャムである。／彼女は丹念に／指先でパン切れを操作する。／そのたびに茶色いジャム壺が／横になったり、逆さになったりして／僕の目の前をうろつく。」—外連味のない日常を実況中継するかのように詠み、でもその奥で息づく森羅万象にまで読者をグッと、優しく引き込む。

惜し気もなく、詩の神髓を差し出してくれる菅原克己に、ぼくは書き手として目標を見つけた。そして彼の作品を、何とか自分のものにしたいと、英訳し始めた。その作業を通じて分かったのは、菅原さんの詩は、言葉で書かれているのと同時に、事物のそうでも丹念に作られてある。一見は頼りない単語に見えても、掘り下げていけばその根は岩盤に達している。ぼくはそこを礎にして、英語バージョンを組み立てていけるのだ。

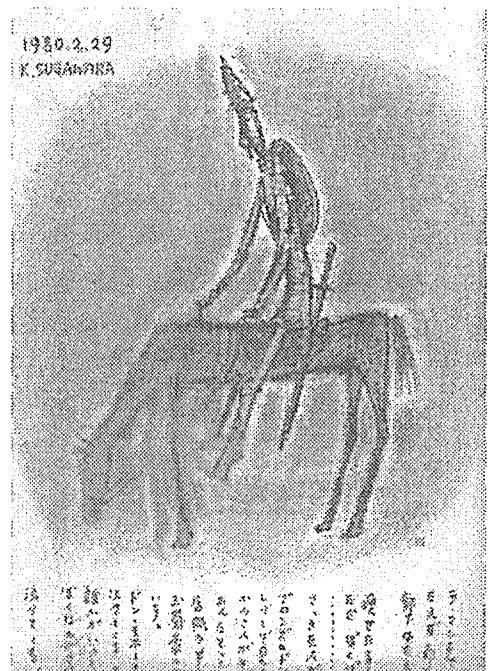
(菅原克己全詩集・葉／アーサー・ビナード
「エリオットと菅原とビュビュド・モンパルナス」より)

【アーサー・ビナード 紹介】

1967年、米国ミシガン州生まれ。コルゲート大学英米文学部卒。

90年に来日、日本語での詩作を始める。詩集『釣り上げては』(思潮社)で中原中也賞受賞。現在は、エッセイをはじめ絵本の創作・翻訳など多岐にわたり活躍。

今年1月、当研究センターの講演会で日本語についての講演が大好評。ぜひ第2弾をとの多くの参加者からの要望もあり、今回あらためて登場いただく。



菅原克己・画 『菅原克己全詩集』より

ブラザー軒

菅原克己

東一番丁、

ブラザー軒。

硝子簾がキラキラ波うち、

あたりいちめん氷を噛む音。

死んだおやじが入って来る。

死んだ妹をつれて

氷水喰べに、

ぼくのわきへ。

色あせたメリンスの着物。

おできいっぱいつけた妹。

ミルクセーキの音に、

びっくりしながら

細い脛だして

椅子にずり上る。

外は濃藍色のたなばたの夜。

肥ったおやじは

小さい妹をながめ、

満足気に氷を噛み、

ひげを拭く。

妹は匙ですくう

白い氷のかげら。

ぼくも噛む。

白い氷のかげら。

ふたりには声がない。

ふたりにはぼくが見えない。

おやじはひげを拭く。

妹は氷をこぼす。

簾はキラキラ、

風鈴の音、

あたりいちめん氷を噛む音。

死者ふたり、

つれだって帰る、

ぼくの前を。

小さい妹が先に立ち、

おやじはゆっくりと。

東一番丁、

ブラザー軒。

たなばたの夜。

キラキラ波うつ

硝子簾の向うの闇に。

※ ブラザー軒は、現在も東一番丁にて営業。

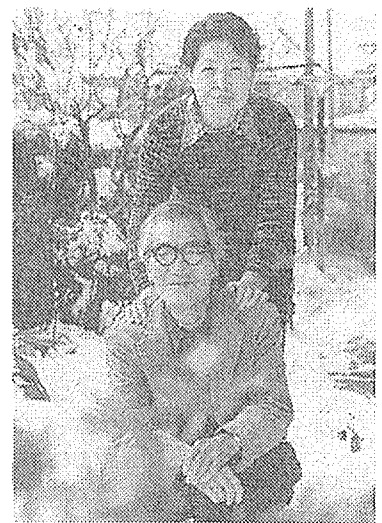
ミュージシャン高田渡が取り上げ歌い、他の

ミュージシャン仲間からも、「ぜひ歌ってくれ

るよね」とリクエストがかかる名曲となる。

菅原克己(1911~1988)

宮城県亘理郡に生まれる。妹まさは、遠田郡涌谷町生まれ。少年時代を仙台で過ごし、宮城県立師範学校附属小学校、宮城県立第一中学校に通う。県立角田高等女学校校長をしていた父親が1923年に急死。母親の実家を頼り栗原郡一迫に転居、間もなく大震災後の東京に移る。豊島師範学校で学ぶが、学生運動に加わって退学処分となる。日本美術学校に入り、のちに銀座の伊東屋宣伝部で働く。言論弾圧に抗して転向せず、34年には「赤旗」の謄写版印刷を一手に引き受ける。戦後は「コスモス」や「列島」などの詩誌に参加。戦前、戦中、戦後の詩作品を51年に第一詩集『手』として出版。55年から日本文学学校の講師をつとめ、中野重治や長谷川四郎、佐多稲子らとともに活動する。『菅原克己全詩集』（西田書店）がある。



菅原克己と妻ミツさん